

日本語初級前半レベルからの自律学習
—セルフスタディープロジェクト導入の課題と可能性—
Fostering Learner Autonomy at the Early Beginner Level of Japanese:
Challenges and Possibilities in Incorporating a Self-Study Project

池田朋子, マギル大学
Tomoko Ikeda, McGill University

1. はじめに

様々な語学学習ツールが身近に溢れ、誰もが簡単に独学で言語を学び始めることが可能な時代となった。大学の初級日本語クラスにも、全くのゼロレベルで入ってくる学生は少なくなり、学期中に授業と並行して独学を続ける学生も見られるようになった。このような状況の中で、教科書の既習語彙をうまく使いながら、クラス全員で足並みを揃えて文法を積み上げていく従来のスタイルの初級授業は、だんだん機能しなくなっている。将来的に自分で学んでいける自律的な学習者を育てることが語学教育の目的ならば、初級の学習者であっても、興味のある分野の語彙をどんどん習得し、同じ興味を持つ人々と会話をするために必要な日本語を自分で学んでいけるよう、我々語学教員はその手助けをすべきなのではないだろうか。そのためには、初級前半レベルのクラスにも、自律学習を取り入れる必要性を感じ、自己主導型学習であるセルフスタディープロジェクトを導入した。本稿では、この実践から得られた課題と今後の可能性について報告する。

2. 研究の背景と目的

筆者はこれまでも、初級後半レベル、および中級レベルの日本語クラスにおいて、セルフスタディープロジェクトを実践してきた。セルフスタディープロジェクトとは、学習者がそれぞれ好きな題材を選び、自分の決めた計画に沿って学習を進めていく自己主導型学習である。これまでは、ある程度日本語の基礎が身についている初級後半レベル以降のクラスにおいて、課外活動として行なってきたが、上記の理由から、初級前半レベルからでも同様の活動を取り入れるべきだと考えた。

とはいえ、全くのゼロレベルでは、できることが限られるため、初級前半コースの2学期目（初級前半レベルの教科書『とびら 1』の後半使用中のクラス）の学習者を対象に、1学期間を通して、何でも好きなことについて書いていくという活動をデジタルブック作成ツールである **Book Creator** を用いて行なった。また、このコースは週5時間の授業時間があり、通常の予習や宿題だけでもかなりの自宅学習時間を要するため、完全な課外活動にはせず、2週間に10時間ある授業時間のうちの1時間を“independent study”とし、セルフスタディープロジェクトの実施に使用した。

本稿では、2024年度、および2025年度のプロジェクト終了後に行ったアンケート結果の分析をもとに、授業時間の10%を用いてセルフスタディープロジェクトを行うという実施方法の有効性、初級前半レベルから導入する自己主導学習の可能性と課題、また、その際の教師の役割の3点について考察する。

3. 理論的枠組みと先行研究

学習者がコース終了後も自律的に日本語を学び続けていくには、学習者オートノミー、すなわち、「学習者が自分のニーズや希望に役立つように、何をどのように学ぶか、学習の成果をどのように評価するか」の意思決定をし、自分の立てたプランを実行する能力（青木 2001）」を育てる必要がある。池田（2021）は、学習者オートノミーの育成を目指し、日本語初級後半レベル、および中級レベルのクラスにセルフスタディプロジェクトを導入した結果、予見（forethought）、遂行（performance）、自己省察（self-reflection）という自己調整学習がうまく進んでいる時に見られる 3 段階のループ（Zimmerman 2001）が確認された。自己調整学習は学習者オートノミーに内包され、その促進を支えると言われている（中田 2015）。さらに、クラスメイトと学習を共有することで、仲間の活動に刺激を受け、自分の計画を立て直すなど、自己省察に影響を与えていることもわかった（池田・磯部 2022）。

初級後半レベルにおける自己主導型学習の導入については、いくつか実践の報告がある。石川（2021）は、自己主導型学習のプロジェクトの終了後に上達が感じられた学習者が多数いた半面、楽しさを感じられない学習者や、自分のレベルに見合わない難しいトピックを選択してしまう学生が一定数いたことに言及し、教師からの適切なアドバイスなどの改善策を提案している。Ogata（2025）は、好きなトピックについて、ブログを書くというプロジェクトを行った。このような学生の興味と自己決定を中心とする学習設計は、日本語のモチベーションを高め、教科書にはない語彙や文法知識の拡大にもつながるとしている。しかし、その一方で、教室外学習の時間管理の難しさ、学習成果の個人差を挙げ、適切なスキヤフオールディングを組み込む必要性を述べている。

福池（2018）は、初級前半レベルの学習者を対象に、自己表現を目的とした自由度の高い発表活動を行った。使用する文型を指定する活動とは異なり、幅広い選択肢の中から、学習者が主体的に使う日本語を決定していたことがわかった。課題としては、中間発表を行うなど、段階的にこのような活動に慣れるための工夫が必要だと述べている。

これらを踏まえ、本実践では、学習者オートノミーの育成という観点から、初級前半レベルにおけるセルフスタディプロジェクトを実施した。

4. 実践概要

4.1 対象クラス・学習者

表 1 対象学習者の人数・期間

	2024 年度	2025 年度
人数	29 人	22 人
期間	2025 年 1 月～4 月	2026 年 1 月～4 月
クラス	初級前半コースの 2 学期目	初級前半コースの 2 学期目
通常の授業時間	5 時間／週	5 時間／週
プロジェクト実施時間	2 週間に 1 時間（10%）	2 週間に 1 時間（10%）
実施回数	6 回	6 回

2024 年度と 2025 年度の初級前半コースの 2 学期目の学習者合計 51 人を対象とした。2 週間に 1 回の授業時間（全体の 10%）をセルフスタディプロジェクトに充て、各年度冬学期に 6 回ずつ実施した。詳細は表 1 の通りである。

4.2 セルフスタディプロジェクトの詳細

本実践は、Book Creator というデジタルブック作成ツールを用いて行った。プロジェクトの流れを表 2 に示す。学習者は好きな題材を選び、その紹介や感想を学期を通して Book Creator に書いていった。はじめに本の目次を作成し、各回に何を書くかを計画したが、この計画は途中で変更してもよいことにした。書く内容は自由だが、毎回 5 文以上、写真などを含めて 2 ページ以上作成し、授業で習っていない言葉を使う場合は、言葉リストをページに含めるというルールを設けた。作業はどこでしてもよいが、毎回締め切り時間までに各回の作業を完成させることにした。最後の回には、4～5 人のグループでお互いの本を読み合い、コメントを書くという活動を行った。成績は宿題と同様に、決められた量のページを時間までに書けたかどうかで点を付け、内容の評価は行わなかった。学期終了後に無記名のアンケート調査を実施した。

表 2 プロジェクトの流れ

週	内容
1～2 週目	プロジェクトの説明、各自題材選び
3 週目（1 回目）	表紙・目次の作成（4 つのトピック決定）
5 週目（2 回目）	トピック 1 について書く
7 週目（3 回目）	トピック 2 について書く
9 週目（4 回目）	トピック 3 について書く
11 週目（5 回目）	トピック 4 について書く
12 週目（6 回目）	録音完成（2025 のみ）、グループで共有、コメント交換
学期終了後	無記名のアンケート調査実施

4.3 2024 年度と 2025 年度の内容の違い

2024 年度は、題材を一つに決めず、「好きな歌」「好きなアニメ」など、毎回異なる題材を選んでもよいこととしたが、好きな題材を一つに絞った方が書きたいことが多く、内容も深まると考え、2025 年度は一つの題材を選び、その中の 4 つのトピックについて書いていくことを勧めた（例：題材＝日本料理、トピック＝寿司、ラーメン、など）。ただし、毎回異なる題材について書きたい場合は、それも許可した。

また、2024 年度のアンケート調査の回答の中に、教師からの添削・修正を求めるものがいくつかあったため、2025 年度は、Book Creator のコメント機能を用いて、文法・語彙の間違いを添削した。

さらに、2025 年度から Book Creator の録音機能を用い、自分が書いた文を読み上げて、そのページに録音ファイルを残すという作業を追加した。この作業は、

声を出して読まなければならないため、発音の練習になるだけでなく、インターネットからの文の貼り付けや、未習語の過剰な使用を防ぐ効果もあると考えた。

4.4 初級後半レベル以降のセルフスタディプロジェクトとの違い

これまで行ってきた初級後半、および中級レベルにおけるプロジェクトでは、題材も学習方法も学習者が自由に選ぶことにしている（例：ドラマを見る、本を読むなど）。しかし、これらの方法は、日本語の知識が限られている初級前半レベルの学習者向けではないと判断し、本実践では、題材は学習者が自由に選ぶが、それを自分のレベルの日本語で書くという方法に限定した。

4.5 分析方法

学期終了後に無記名のアンケート調査を行った。回答者 22 名（2024 年度：13 名、2025 年度 9 名）のアンケート結果を分析し、自由記述項目にはテーマ分析（Braun & Clarke, 2006）を適用した。上記の通り、2025 年度には一部の活動内容に変更が加えられたが、プロジェクトの基本構成は両年度で共通していたため、回答を統合して分析した。その際、抽出されたテーマに年度による偏りがないかも併せて確認した。

5. 結果と考察

5.1 授業の代わりに行う実施方法について

2 週間に 1 回（10%）の授業時間をセルフスタディプロジェクトに使用することについては、7 段階評価の平均が 6.47/7 だったことから、学習者からは概ね好意的に捉えられていることがわかった。平均学習時間は 1 回につき 1.7 時間であった。授業時間が減ることによる成績への影響については、総合成績を見る限りでは、両年度とも平年と比べて際立った差はなかったが、毎年評価方法の変更もあるため、単純には比較できない。この点は今後慎重に観察していく必要がある。

5.2 セルフスタディプロジェクトの導入について

セルフスタディプロジェクトに関する自由記述の分析の結果、①自分で決める楽しさ、②自分で考える能動的な学習、③上達を実感、④他者との関わりを通じた学び、⑤ストレスのない環境、⑥学習上の課題という 6 つのテーマが抽出された。以下テーマを【】、サブテーマを<>、コード、主な発言を「」で表す。

①【自分で決める楽しさ】

最も多くのコメントがこのテーマに集中していた。<自由に選べる>、<好きなことを学べる>ことは単純に「楽しい」ものである。「自分で選べるのでやる気が出る」という意見は、これまでの初級後半レベル以降のセルフスタディプロジェクトの結果とも共通している。また、普段の授業や課題とは異なるフォーマットで学べることも「新鮮」で、「日本語が趣味と結びつくのが楽しい」と感じていたことがわかった。

②【自分で考える能動的な学習】

次に多かったのがこのテーマに関するものであった。＜伝えたいことを日本語で表現＞するために、習った文法や語彙を使うだけでなく、＜学んだことを応用＞しながら、＜新しい日本語に挑戦＞し、＜自主的な実践＞を重ねていることが窺われた。また、＜自由に表現・工夫できる＞ことが、＜モチベーションの向上＞につながっていることも示唆された。

③【上達を実感】

すべての回答者が上達を感じていたことが、アンケートの数値に見られ、特に作文能力と語彙力の上達に関しては、4段階評価の平均値が 3.72/4、3.53/4 と高く自己評価されていた。また、「振り返ることで成長を見ることができた」、「毎回自分の文が上達していることが確認できた」などのコメントから、＜ふりかえり＞により、上達を実感していることが考えられる。さらに、「習った語彙が使えるようになった」、「日本語を書くいい練習になった」、「書く力が伸びた」、「文法や語彙の復習になった」などのコメントから、好きなことを書くという活動を通して、授業で学んだことがふさわしい場面で使えるようになり、＜学習内容の定着＞につながる可能性も示された。

④【他者との関わりを通した学び】

クラスメイトと自分の本を読み合い、コメントを交換する活動は、＜他者からの刺激＞を受けるだけでなく、「誰かが見ると思うと、何を書くかよく考える」「ほかの人にわかりやすく書く練習になった」など、＜読み手を意識＞して書くという学びになっていたことが窺われる。また、「クラスメイトのことをもっと知ることができた」という声が多数あり、日本語が＜他者を理解＞するための手段として使われていたことがわかった。このことから、このプロジェクトが、日本語を学ぶだけでなく、クラスメイトを知り、他者とのつながりを生む学習経験になっていたと考えられる。

⑤【ストレスのない環境】

うちで＜リラックス＞して、＜自分のペース＞で学べることは、ストレスをなくし、学習意欲を促進する要素になる。1学期に何コースも同時に履修している学習者らにとって、「他の授業とのバランスがとりやすい」という利点もあり、うまく日本語の学習時間を確保する方法にもなっていることがわかった。

⑥【学習上の課題】

プロジェクトに関する否定的なコメントを【学習上の課題】としてまとめた。4.3 で述べた通り、2024 年度の回答には、＜添削の必要性＞に関するコメントが 4 件見られた。それらは、「添削がないとまちがいをそのまま覚えてしまう」「自分の文が正しいかどうかわからない」などの不安を表すものだった。それを受け、2025 年度は単純な語彙・文法の間違いへのフィードバックを加えたところ、2025 年度はこのような回答はなかった。

教師のフィードバックに関して、池田・磯部（2025）は、初級後半レベル以降のセルフスタディプロジェクトでは、学習者は訂正フィードバックよりも、フィードフォワード、つまり、将来の学びに対するアドバイスを求めていると述べている。しかし、まだ日本語を使った経験が少ない初級前半レベルでは、教師による訂正フィードバックが学習の援助になるだけでなく、不安を取り除く要素にもなると推察される。

また、＜時間がかかる＞というコメントがいくつか見られた。アンケート結果では1回のセルフスタディの平均は1.7時間であった。これは1時間の授業の代わりの自習時間としては妥当な時間だと思われるが、中には4時間以上という回答もあり、学生による差が大きいことがわかる。Book Creator の使い方などの＜テクニカルな問題＞に対応する時間もここに含まれると想像できるため、教師からの適切な指示や、いつでも質問を受け付ける体制が十分ではなかったと思われる。

語彙・文法不足による＜内容の難しさ＞を訴えるコメントに対しても、難しすぎるトピックを選んでいないか、どうすれば今のレベルで書くことができるかなど、教師からのアドバイスが必要であった。しかし、「難しいから、もっと学ぼうという気になった」というコメントからもわかるように、好きなことを説明するために、難しいことに挑戦することで、モチベーションが向上するケースもある。そのため、教師がアドバイスをする際には、ただレベルを下げて、現在のレベルに合ったものを選ばせるだけではなく、学習者の可能性とのバランスを考慮するよう心掛ける必要がある。

テーマによる＜学習の偏り＞を指摘する声もあった。このうち 2024 年度の「話す機会がない」というコメントには、2025 年度に録音タスクを課すことで、ある程度対応できたと思っている。③【上達を実感】で述べた、上達を感じるかという質問の回答をスキル別に見ると、話す・聞くについては、どちらも 2024 年度より、2025 年度の方が高くなっていた（話す：1.69/4 から 2.22/4、聞く：1.42/4 から 2.63/4）。

さらに、「テーマによってたくさん学べる人とそうでない人がいる」という声があったが、セルフスタディにおいて、「たくさん学べた」、「上達した」かどうかは、本人がそう感じるかどうかに意味があり、そう感じることで学習が継続し、結果的に実際のレベルも上がっていくものである。学習者が「たくさん学べた」と感じ、その後の自律学習につなげるためには、プロジェクトの途中で自身の学習を振り返り、その後の計画を修正して、再び実行する自己調整学習のサイクルを作ることが必要である。今回の実践では、振り返りを学習者本人に任せ、特にその機会を設けていなかったが、今後は定期的に振り返りを取り入れ、自己省察の機会を作ることが課題として挙げられる。

また、学習者からのアドバイスとして、「もっと早く始めると、トピックについてじっくり考えられる」という意見もあった。初級前半レベルの2学期目からセルフスタディプロジェクトを導入することが、早すぎるかもしれないという懸念もあった中、このような声が上がったことは興味深い。早く始めることで、

早期に日本語学習の目的が明らかになり、モチベーションの向上にもつながる可能性が示唆された。

5.3 教師の役割について

上記のテーマ分析から導かれた教師の役割をまとめる。まず、初級前半レベルに必要な教師からのフィードバックが挙げられる。このレベルでは、自分が書いたものが正しいかどうかの確認も難しく、それが学習者を不安にさせていることがわかった。その不安を低減させるためにも、訂正フィードバックは有効であると思われる。ただし、文法や語彙の添削だけに集中するのではなく、自分で調べる方法や学習リソースを提示する（木下他 2024）など、適切なスキaffォールディングを組み込みながら、自己調整学習を促す方法に徐々にシフトし、初級後半レベル以降の自律学習につなげていく必要がある。

次に、学習者が選んだ題材やトピックに対するアドバイスと、その後の見守りの重要性が示唆された。学習者のレベルと興味、目的、可能性のバランスを読み取り、基本的には題材の選択は学習者の意志を尊重しつつ、方法や量に無理がないか確認することが求められる。また、学習者が自らの学習を振り返り、上達を感じたり、計画を修正したりする機会を提供することが、自己調整学習の3段階のループを作り、学習者オートノミーの発達を促すと考えられる。

最後に、セルフスタディーのモチベーションを維持するためには、お互いに刺激を与え合い、共に学んでいく他者の存在が意味を持つ（池田・磯部 2022）。そのことに気づかせる環境を作っていくことも、将来自律学習のできる学習者を育てていく上での教師の重要な役割であると言えるだろう。

6. まとめと今後の課題

本研究では、日本語レベルが初級前半の段階からの自律性の育成を目指し、Book Creator を用いた書く作業を中心とする自己主導型学習の実践を行った。その後実施したアンケート調査は、回答率が低いため、本研究の結果を一般化することには限界があるが、回答者の自由記述からは、セルフスタディープロジェクトの教育的効果や課題に関するいくつかの示唆が得られた。

授業の10%をセルフスタディープロジェクトに置き換えることに対しては、学習者から高評価が得られ、授業の遅れや成績の低下なども見られなかった。ただし、成績に関しては他の様々な要因も影響するため、さらなるモニタリングが必要である。

セルフスタディープロジェクトの導入に関するアンケートの自由記述からは、6つのテーマが抽出され、本実践が、好きなことを自由に選択できる楽しさ、能動的な学習、上達の実感、他者との関わりを通じた学び、ストレスのない学習環境を提供し、初級前半レベルでも効果のある方法であることが示された。一方で、学習上の課題も明らかになり、初級前半レベルに必要なスキaffォールディングとしてのフィードバック、適切な題材の確認、振り返りの機会の提供、他者の重要性に気づく環境作りが教師の役割として挙げられた。

これらの課題に改めて一つずつ取り組んでいくことを今後の課題とし、初級前半レベルでの自己主導型学習を引き続き取り入れていきたい。学生からのアドバイスにあったように、もっと早い時期からの実施も検討したいと考えている。

注

i) 本稿における「初級前半レベル」とは、日本語初級教科書の1冊目（『とびら1』『げんき1』など）を使用中のレベルを指す。「初級後半レベル」とは、日本語初級教科書の2冊目（『とびら2』『げんき2』など）を使用中のレベルを指す。

参考文献

- 青木直子（2001）「教師の役割」青木直子ほか（編）「日本語教育学を学ぶ人の多めに」182-197 世界思想社
- 池田朋子（2021）「セルフスタディープロジェクトを通して学習者の自律性を育てる」『CAJLE Annual Conference 2021 Proceedings』31-40
- 池田朋子・礒部靖世(2022)「オンラインによるピアサポートが自律学習に与える影響—セルフスタディに他者は必要か—」『CAJLE Annual Conference 2022 Proceedings』, 61-70
- 池田朋子・礒部靖世(2025)「自律学習におけるピアと教師の役割—セルフスタディに取り組む学習者の求める学習環境とは—」『CAJLE Annual Conference 2025 Proceedings』, 45-53
- 石川比奈子（2021）「オンライン授業 自律性プロジェクト 実践報告「ジーニアス・アワープロジェクト」」『CAJLE Annual Conference 2021 Proceedings』41-47
- 木下直子・黒田史彦・トンプソン美恵子（2024）『日本語学習アドバイジング—自律性を育むための学習支援—』ひつじ書房
- 中田賀之（2015）『自分で学んでいける生徒を育てる—学習者オートノミーへの挑戦—』ひつじ書房
- 福池秋水（2018）「初級日本語クラスにおける「自己表現」を促す発表活動の試み」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』28, 33-47
- Braun, V., & Clarke, V. (2006). Using thematic analysis in psychology. *Qualitative Research in Psychology*, 3(2), 77-101.
- Ogata, K. (2025). Promoting student motivation in language learning: A mixed-methods study. *Journal of Information Systems Engineering and Management*, 10(44s), 553-561.
- Zimmerman, B. J. & Schunk, D. H. (2001). *Self-regulated learning and Academic Achievement: Theoretical perspective*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- （塚野州 2006 編訳, 伊藤崇達・中西良文・中谷素之・伊田勝憲・犬塚美輪翻訳『自律調整学習の理論』北大路書房）